

■シンポジウム：座長記

記憶障害への新たなアプローチ

加 藤 元一郎*

(高次脳機能研究 24(2) : 117~118, 2004)

第 27 回日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）総会では、鹿島晴雄会長の企画のもと、2003 年 12 月 4 日の午後約 2 時間にわたって、「記憶障害への新たなアプローチ」と題したシンポジウムが行われた。「新たな」という意味は、従来の損傷法（lesion analysis）とは異なる方法を用いて、記憶障害の出現機序や記憶の神経基盤を探索していることをさしている。

神経心理学的研究が、ヒトの記憶の神経基盤に関する研究の中核にあることは言うまでもない。ある脳部位の損傷により、ある認知機能が障害されるということは、その部位がその機能にとって必要であることを決定的に示している。一方、ニューロイメージング法の 1 つである脳賦活研究で活動が示される部位は、1 つの機能ないしは課題の達成のためにその部位がある蓋然性をもって動因されることを示しているのみであり、その部位は機能にとって必要条件とはなりえない。しかし、脳賦活研究では、その方法が多様で、また課題を柔軟に工夫することができ、このことにより新たな知見をもたらすことができるという利点がある。今後の記憶研究発展のためには、この 2 つの方法が相補的に用いられることが重要であることは、本号の月浦論文でも強調されている。

シンポジウムは、安野史彦先生（放射線医学総合研究所）の「海馬セロトニン系と顕在記憶」から開始された。セロトニン受容体を検出するために開発されたリガンドを用いた PET 研究である。この講演では、16 人の被験者において、海馬における後シナプスセロトニン（5-HT_{1A}）受

容体結合能が上昇するにしたがって WMS-R の記憶指標の成績が低下することがまず示され、さらにセロトニン作動薬が AVLT の成績を用量依存的に低下させることが報告された。この報告は、ヒトの顕在記憶機能と神経伝達物質系における受容体の結合能との関係を直接的に明らかにした非常に貴重な研究である。また、研究の位置づけとしては、従来から指摘されている海馬と記憶の関係の内的メカニズムをヒトにおいて探索するという新たな領域の第一歩と考えられる。また今回は、セロトニン作動薬が記憶を低下させるというものであったが、この所見と逆の関係、すなわち、セロトニン遮断薬が記憶を改善させる可能性が示唆されており、認知薬物療法の観点からも興味深い。

続いて、「記憶の神経基盤解明のための複合的アプローチ：非侵襲的脳機能画像法と神経心理学的方法」というタイトルで月浦 崇先生（産業技術総合研究所）の報告が行われた。まさに、脳機能画像法と神経心理学的研究の相補的・融合的研究であり、将来の研究方向をも予感させる貴重な報告であった。この報告では、エピソード記憶の検索過程における各要素の連合プロセスによって、側頭葉内側部、とくに海馬傍回がキーとなる役割を演じることが、ヘルペス脳炎後健忘例の逆向性健忘における再認課題と 4 コマ漫画のストーリー想起を用いた fMRI 研究で同時に示されている。両研究法ともに、施行された課題が非常に工夫されていることが印象的であった。

次に、緑川 晶・吉村菜穂子・河村 満先生（昭

*慶應義塾大学医学部 精神神経科 〒160-8582 東京都新宿区信濃町35

受稿日 2004 年 6 月 7 日

和大学)により、「てんかん性健忘」と題する報告が行われた。てんかん発作により通常では見られないような非典型的な健忘が生じることが報告されたのは、おそらく Ahern ら (1994) および O'Connor ら (1997) のケースが最初であろう。このケースで注目されたのは、記憶が数時間ないしは数日なら良好に保持されるが、それ以上の期間になるとまったく保持されなくなるという現象である。これ以後、とくに最近では Kapur らによりいくつかの報告が重ねられている。今回の緑川先生による症例は、てんかん発作に伴う上述の very long-term amnesia の本邦で初めての報告であり、非常に貴重な講演であった。興味深いことに、この症例では、てんかん発作に関連して 20 年以上にわたる逆行性健忘が記載されている。この現象は、一度固定化された記憶がてんかん発作により、消しゴムや黒板ふきによって消される (erase) かのごとく消失する可能性があるという Ahern ら (1994) の予想を支持しており、てんかんと記憶障害との関連を考えるうえでも非常に示唆的である。

続いて、池田 学先生 (愛媛大学) による「アルツハイマー病における物盗られ妄想と記憶障害の関係について」という講演が行われた。妄想と記憶障害との関連についての新たな挑戦である。焦点は、アルツハイマー病の物盗られ妄想であり、この妄想に対して神経心理学的検討と脳局所血流量の分析が行われている。結果は、物盗られ妄想を示すアルツハイマー病で右側楔前部に血流低下を認めるというものであった。この結果の解釈は難しい。というのは、神経心理学がこの部位

がどのような機能をもつかについての解答を提出していないからである。なお、アルツハイマー病の物盗られ妄想は、本邦では西欧諸国と異なり女性に多く出現するという。この件に関する比較文化精神医学的考察は非常に楽しいものであった。

最後に、「精神神経疾患における記憶障害」というタイトルで、松井三枝先生 (富山医科薬科大学) の講演が行われた。統合失調症について、とくにその意味記憶障害に関して、連続的かつ系統的な神経心理学的障害が報告され、非常に重要なデータと思われた。また、統合失調症におけるスキーマ (知識構造) や記憶戦略についての障害に関する考察は非常に示唆的で、今後の統合失調症研究に大きな影響を与えられた。

今回のシンポジウムでは、受容体結合能、functional MRI、てんかん、妄想、スキーマなど多種多彩な記憶障害へのアプローチが紹介され、若干まとまりに欠けるという印象を持たれた方も多いと思う。これは、すべて企画者の責任であり、お許し願いたいと思う。しかし、この記憶障害のもつ多様性こそ、ヒトの記憶機能をより正確に理解するための研究の最大の武器ではないかと思う。また、高次脳機能障害に関する研究が、脳機能画像研究をはじめとした新たな研究へ至るために、いかに多くの基礎的な知見をこれまで提供してきたかが実感され、高次脳機能障害研究は今後もさらに重要な方法であり続けるであろうと確信された。この意味でも、本シンポジウムが開催された意義は大きい。鹿島晴雄会長に改めて感謝申し上げたい。